



# 中華民國 台灣投資通信

発行：中華民國 經濟部 投資業務処 編集：野村総合研究所 台北支店

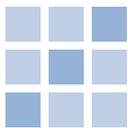
February 2008

vol. 150

今月のトピックス  
 經濟部加工出口区  
 飛躍する台湾産業  
 太陽電池関連産業(1)  
 台湾進出ガイド  
 台湾の居留ビザと居留証の取得について(5)

日本企業から見た台湾  
 ~ 朝日啤酒株式会社台湾事務所  
 伊原寛隆所長インタビュー ~  
 お酒の楽しみを多くの方々にお届けしたい!  
 台湾マクロ経済指標  
 インフォメーション

## 【今月のトピックス】



### 經濟部加工出口区

1966年に世界初の輸出加工区が高雄に設立されて以来既に42年になるが、この間に高雄園區、楠梓園區、台中園區、中港園區、臨広園區、高雄ソフトウェアパーク、屏東園區、小港航空貨物園區(開発中)の8つの園區が成立している。今回は輸出加工区の歴史とその活用の仕方について紹介する。また、經濟部出口加工区管理处(輸出加工区管理处)曾參實処長にお話を伺い、輸出加工区の発展ビジョンなどを紹介いただいた。

#### 一、輸出加工区の歴史

台湾の輸出加工区の歴史は台湾の産業構造の歴史と言っても過言ではない。世界初の輸出加工区が高雄に誕生したのが1966年。輸出加工区の取り扱い品目は、当初は白黒テレビやトランジスタラジオ、計算機、ステレオなどの音響、家電製品やアパレル関係、螺子、皮革製品、プラスチック製品などが主体。その名通り100%輸出が義務付けられていた。

その後、1990年代中葉まではICパッケージング、STN-LCD、汎用PCBなどが中心で電子部品の割合は76%に及び、残りをアパレルやその他の金属、プラスチック製品などが占めた。1990年代後半になるとICパッケージングは高付加価値品に移行し、その他、TFT-LCDや高付加価値受動部品やICが生産されている。

輸出義務も段階的に緩和され、1987年から50%まで内販が、1997年には100%国内販売が可能になった。このため園區全体で見ると、現在は輸出比率が65%程度にまで下がっており、サイエンスパークなど国内のセットメーカーへの裾野産業として台湾のハイテク産業を支えている。

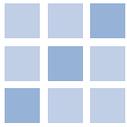
例えば中港輸出加工区(台中港)では、LCDパネル及び精密機械メーカーが台湾企業、日系企業にかかわらず集中している。これは中部サイエンスパークを中心としたLCDパネルメーカーへの供給を目的として立地している。また、昔から台中地区は金属加工、機械製造業が盛んな地域で、中部サイエンスパークを中心にパネル・半導体メーカーを顧客とする精密機械メーカーも集中している。

#### 二、輸出加工区の活用方法

高付加価値な研究開発機能を前提にしているサイエンスパークとは異なり、輸出加工区は、輸出のための物流基地から量産製造までの幅広い機能の入居が可能である。輸出加工区には幾つかのメリットがある。

第一に、輸出加工区に既に輸出加工の義務はなく、100%の内販が可能である。

第二に輸出加工区は保税機能を有する。日本企業では、キーデバイスや主要材料を日本から調達し、輸出加工区で付加価値を加えて、サイエンスパークに製品を販売するケースが多い。この場合、日本から保税で輸入し、



保税のままサイエンスパーク(サイエンスパークも課税上保税扱いである)の顧客まで販売が可能となっている。

また、保税区の顧客に日本から直接輸出していた日本企業が、台湾子会社を課税区に設置し商流に絡めると、関税などの問題が発生する。しかし、輸出加工区に入居すれば、この問題は回避可能な上、保税工場や保税倉庫の認定のための煩雑な手続きも不要である。

輸出加工区内の企業が加工区外の企業に一部加工を外注に出す場合にも、一定の条件を満たせば、保税を維持できることも、台湾企業の高い加工能力を活用でき

るため、非常に魅力的である。

当然ながら、海外輸出基地としても、単純な保税倉庫から保税工場としてまでその機能をフルに発揮してくれる。

半導体や液晶産業ではグローバルにその存在感がますます強まり、その素材、設備面を支える日本企業にとってはビジネスチャンスが拡大する台湾である。また、中国一辺倒からASEANへと地域的な分散が進む中、日本、中国、ASEANを結ぶ結節点としての役割も持つ台湾。これらの台湾のメリットを享受するため、輸出加工区はベストソリューションを提供してくれると言える。

#### 經濟部輸出加工区管理处 処長インタビュー



經濟部輸出加工区管理处 処長  
曾參賈氏

台湾に進出を考えている日本企業にお勧めの園區はどこでしょうか？

輸出加工区は1966年に誕生してから既に40年余りが立ちました。将来は引き続き投資環境の改善と工場の更新計画などを実施していきます。幾つかの古い園區は既に一杯ですが、新しい園區を推薦可能で、中港園區、高雄ソフトウェア園區、屏東園區などです。

中港園區は台中にあり、まだ、20haほどの未使用地があります。産業クラスターとしては中部サイエンスパークとの関係が非常に深く、LCD関連設備、LCD関連ガス・材料などのメーカーが主に入居しています。

屏東園區は124haの総面積があり、20数haが入居可能です。現在、入居しているのは大部分が鉄鋼、自動車関連です。ただし、現在、太陽電池関連の大手企業と6haほどの工場開発計画を交渉中です。これに関連周辺メーカーの誘致も行っており、園区内でバリューチェーンが垂直統合できるよう努力しています。これがまとまれば、残りの未使用地も大きく必要になるかもしれません。

この他、高雄ソフトウェア園區では現在、10万坪の床面積

のオフィスビルを販売中です。(編集注:土地は輸出加工区管理局から賃借、購買は建物のみ)ここはソフトウェア、IT産業関連企業のR&D、貿易、オペレーションセンター基地となるでしょう。

現在の入居企業にはどのような優遇措置が与えられますか？

優遇措置については、皆さんもご存知な関税優遇措置のほかに、高雄ソフトウェア園區の工場に対する地代補助措置があります。高雄ソフトウェア園區では、入居企業はデベロッパーからオフィス社屋を購入するほか、地代を管理局に支払う必要があります。しかし、地代については4422減免措置があります。これは当初2年間は6掛け、次の2年間で8掛けになるものです。この他に、高雄市政府から3割の地代補助が別途支給されますので、当初2年間は3割のみ、次の2年間は5割のみになります。

また、貸付利息に対する補助(最高2.5%)や家屋税の減免があり、当初2年間は100%補助、次の4年間は50%となっています。是非、日本企業にも入居していただきたいと考えています。

輸出加工区の発展ビジョンを伺えますか？

園区内の企業が更に大きなグローバル市場で発展できるように、将来は輸出加工区とASEAN諸国との協力計画があります。これは相互の設定域内での関税免除を予定しており、双方の人員、貨物、金融面での交流が深まることを期待しています。

台湾に企業が根を張り、更に台湾から海外へ投資することで、ASEAN市場を拡大していく。これこそが、輸出加工区のブルーオーシャン戦略だ、と考えています。